

して与えらるゝとすぐに歌って答えるというように、面白い遊びの中、あるいは童話の世界で自然に音感を身につけさせるという環境作り
に指導者の創意工夫が何より大切であるということがわかった。

III 結果の考察

このような指導の結果、別表Ⅰ、Ⅱからみても明瞭なるごとく、和音、単音いずれの場合においても年少組の方が年長組に比べてよい結果となつてゐることがわかつた。これらの事柄について当時の卒園生にも全く同一の方法による音感教育を試みてみたが、当時の在園生と比較して、卒園生は在園生の年長組よりも悪いことが明瞭だつた。

したがって音感教育は小学生より一年保育児、一年保育児より二年保育児の方がより効果的であるということがいえると思う。三年保育では発達段階からみて集団指導は無理なように見受けられた。

IV 結びと今後の問題点

以上の研究により、音感教育は幼児期、なかんずく、二年保育の時が最も適期であり、かつ集団的に実施することの可能性も認められたと思う。したがって私たちは幼児期においてなさねばならないものの一つに音感教育をあげ、しかもそれは二年保育の時の方が一年保育になつてからよりもより効果的であるということがいえる。なお、今後の問題として幼稚園でつけられた音感を小学校入学と同時に中断されることなく小学校でも引き続き実施してもらえればよいが、卒園生は高松市の各小学校に分散して行くので卒園後は友の会（同窓会）活動の一つとして放課後週に二回幼稚園へ集り音感指導を続けている。このようにして音感教育を施した子どもたちの行先を見守りつつ研究を続けて行きたいと思つてゐる。

〔注〕表3、表4で年少の方が悪くなつてゐるのは、短かい期間に多

くの和音を与えるなどのようになるか試したところ、急にその数が増加したため、和音と和音名との結びつきに困難を感じ、その表現に迷つたものと思われる。

幼児期における美術教育

——認識過程としての美術教育批判——

幼年教育研究所

守屋光雄

戦後において、幼児画の教育がとくに取りあげられるようになった理由の第一は、幼児画の指導が、単なる手先の技術の訓練などを重視する立場からではなく、民主主義教育の目標である主体性の確立した人間形成のために、創造性を重んずる立場から論ぜられるようになったからである。

この立場では、幼児の創造力を最大限に育てかつ伸すために、その障害となるような抑圧を退け、幼児の精神を抑圧から解放し、コンプレックスを解消することの重要性を主張し、従来の技術主義の美術教育を否定し、幼児自らの見方、技法で、主として記憶や想像によつて、すぎな絵を自由にのびのびとかかせる。教師は、幼児の描画意欲を活潑におこさせるために、刺激を与え、承認、賞讃、激励を与え、環境を整え、描画の結果よりもプロセスを重んずる。したがつて、幼児期におけるスリエや写生などは排斥する。さらには、教師自身の精神衛生も重視して、抑圧や劣等感に満ちた教師の

解放をも叫ぶ。

ところでこのような創造美術教育の立場の理論的背景は、主として、フロイドに流れを汲む精神分析学である。したがって、この立場では、無意識(深層)心理が重視され、幼児画は、無意識的欲求や情緒、フラストレーションや、コンフリクトの自己表現またはカタルシスとみなし、幼児画をパースナリティの診断や治療の方法として利用する。

たしかに、こうした創造美術教育の主張は、人間形成の心理からみても多くのすぐれた理論をもち、実践面においても、幼児の絵に飛躍的進歩が認められつつある。ただ、この主張の背景になっっている精神分析学の理論にもなお批判の余地があるばかりでなく、児童画の理解が精神分析学のみによらねばならぬと考えたり、創造力を、先天的なもの、本能的なもの、と素朴に考えがちであることは批判されねばならない。

ところが、最近いわゆる新教育、したがって、創造美術教育に批判的な人々の中に、現実の事物の認識を深め、これを創造的に表現させるには、ただ子どもたちに、すぎな絵を自由にのびのびとかわかせ、子どもの創造力を豊かにし、その内部の精神の自然な発展を信頼するだけでは不十分であるとの見解から、もっと積極的に子ども同志の話し合などを媒介として、主として視覚的認識をたしかにさせるべきだと云う、いわば新しいリアリズムに立つ美術教育が主張されてきた。

創造美術教育とこの新しいリアリズムの美術教育を比較してみると、前者が描画を自己表現とみるに對し、後者では、認識過程と考へ、前者がフロイドの精神分析学を背景とし、無意識の心理を重視するのに對して、後者では、パウロフの条件反射の学習論を基礎と

して、意識的経験を重視する。前者が記憶や想像によって描かせるのに對して、後者は、視覚造形的な表現活動を重視するから写生画もとり入れる。後者は、このように、正しいものの方や考え方に つながる個人の願いを造形的表現を通じてみんなのものにしていく美術教育の立場ということになる。前者が人間形成とか抑圧からの解放とかいいながら、ややもすると恣意的な人間形成に陥り、社会をより正しい秩序のもとに方向づけようとする背骨の通った創造的人間を育てるには役立たないとなぜ難する。さらに、感情情緒の世界も言語の発達にもなつて言語的知的認識の過程による裏付けが必要であり、幼児期においても、話し合いを媒介として、ものの認識をたしかなものとし、描画表現をできるだけ視覚的にも正しいものに発達させていくよう指導される。たしかに、創造美術教育には前述のごとき欠点があり、また今なお研究の途上にあるいくつかの問題もあるし、他方、認識過程を重視して、適切な訓練をすることも必要にちがいない。しかし、その方法が児童の発達心理を無視して行われ、また民主教育を逆行させる方向に向けられるならば、それは何十年昔の技術主義の図画教育への逆行でしかないし、知的認識の重要性を強調するあまり、レディネスや、学習への意欲や態度を無視して訓練が強いられたり、個人差を考慮するとしても知的リアリズムの段階にある幼児に、視的リアリズムを強いることも容易に許されてはなるまい。私たちは、これらの未解決の問題について、さらに理論的ならびに実践的研究をつづけ、幼児期の美術教育の正しいあり方をうちたてていきたい。